

ダニエル書8章 雄羊と雄山羊の幻(ダニエル第二の幻)

※幻：神の靈感を受けた人に示される異象。現実には存在しない動物や、異常な現象を通して与えられる神の啓示。ちなみに、夢は①睡眠中に見る幻覚体験、②睡眠中に持つ幻覚を言う。

【ダニエル書8：1～8】→第二の幻の内容 8:2……8:14

わたしダニエルは先にも幻(→第一の幻：7章)を見たが、その後ベルシャツアル王^{※1}の治世第三年(BC550)に、また幻(→第二の幻)を見た。その幻の中であって、見るとわたしはエラム州の都スサ(後の



ペルシアの首都)におり、ウライ川(→ダニエル書8：2、16、大きな人造運河)のほとりにいるようであった。目を上げて眺めると、見よ、一頭の雄羊(→メディア・ペルシア)が川岸に立っていた。

二本の角(→メディアとペルシア：ダニエル書6：9、13)が生えていたが共に長く、一本は他の一本より更に長くて(→ペルシア)、後ろの方に生えていた。

←BC 6 世紀

4 国対立時代のオリエント

←ペルシア帝国の最大領域

出典(図)：世界史の窓



見ていると、この雄羊(→メディア・ペルシア)は西(キュロス 2 世による BC547 のリディア、BC539 のバビロンの征服)、北(ダレイオス 1 世の BC513 の失敗に終わったスキタイ遠征)、南(カンピュセス 2 世による BC525 頃のエジプト等の征服)に向かって突進し、これ(→メディアとペルシア)にかなう(→敵う：対抗できる)獣は一頭もなく、その力から救い出すもの

もなく、雄羊(→メディア・ペルシア)はほしいままに、また、高慢にふるまい、高ぶった。

→最初は「メディア」が主導権を握ったが、後には「ペルシア」によって二つの国が統一された。←

これについて考えていると、見よ、西から一頭の雄山羊(→マケドニア<ギリシア>)が全地の上を飛ぶような勢いで進んで来た。その額には際立った一本の角(→アレキサンドロス大王^{※2})が生えていた。この雄山羊(→マケドニア<ギリシア>)は先に見た川(8：2 ウライ川)岸に立っている二本の角のある雄羊(→メディア・ペルシア)に向かって、激しい勢いで突進した。

みるみるうちに雄山羊(→マケドニア<ギリシア>)は雄羊(→メディア・ペルシア)に近づき、怒りに燃えてこれを打ち倒し、その二本の角(→メディア・ペルシア)を折ったが、雄羊(→メディア・ペルシア)には抵抗する力がなかった。

雄山羊(→マケドニア<ギリシア>)はこれを地に投げ打ち、踏みにじった。

その力から雄羊(→メディア・ペルシア)を救い出すものはなかった。

雄山羊(→マケドニア<ギリシア>)は非常に尊大になったが、力の極み(at the height of his power)で角は折れ(→BC323 アレキサンドロス大王、バビロンで熱病 - マラリアに侵され死去)、

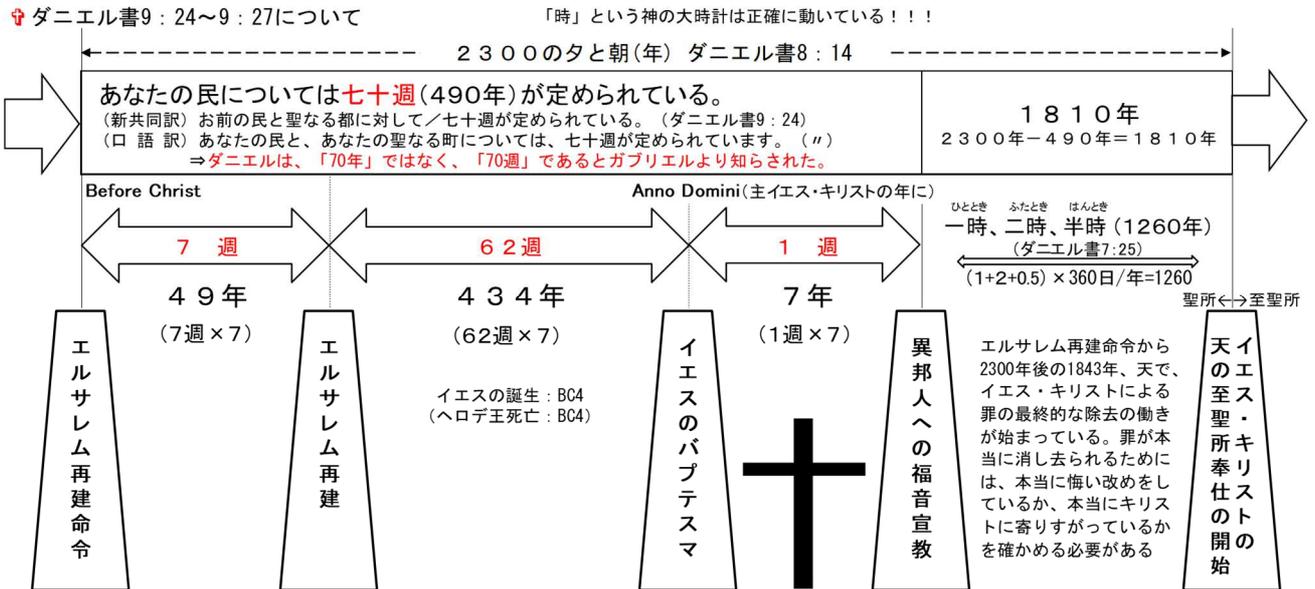
その代わりに四本の際立った角が生えて天の四方に向かった(ギリシアは四つの国<四人の将軍>に分割された^{※2})。



絶頂、最高潮、極地
↑

(以上、ダニエル書8：1～8)

※4：「二千三百回」は、ダニエル書8：14 のみに出て来る表現。
 →2300 の夕と朝は 2300 日で、「一日一年」の法則（民数記 14：34、エゼキエル書 4：6）より、2300 日は 2300 年である。



※5 聖所は清められる →大贖罪日（大祭司が年ごとに第二の幕屋、つまり至聖所で行う奉仕の日）大祭司が至聖所で行う奉仕の日である「大贖罪日」は、聖書暦第七の月（ティシュリの月）の10日目に当たります（→「ヨム・キプル」㊟祭司が日ごとに第一の幕屋、つまり聖所で行う奉仕とは異なる）。大祭司は会見の天幕の入り口に立たせていた二頭のやぎのためにくじを引き、一頭は「主のために」、もう一頭は「アザゼルのために」と決めます。

「主のために」とされたやぎは罪のいけにえとしてほふられ、その血を至聖所に携え、贖い箱の前で指で七回降りかける。これにより、民の罪は赦され、神と人との交わりが可能となり、神に近づくことができるようになる。

他方、「アザゼルのため」とされたやぎは、大祭司がそのやぎの頭に両手を置き、イスラエルの民のすべての咎とすべての罪を告白して、そのやぎに負わせ、そのやぎを荒野に放ちます（「放つ」とは決して戻って来ないように追いやること、つまり、神が民の罪を忘れ去ることを意味しています）。

→レビ記 23：28～30

▶太陽暦・ユダヤ暦・バビロニア暦

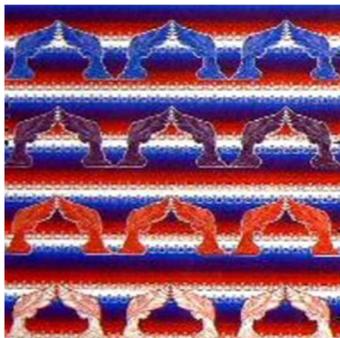
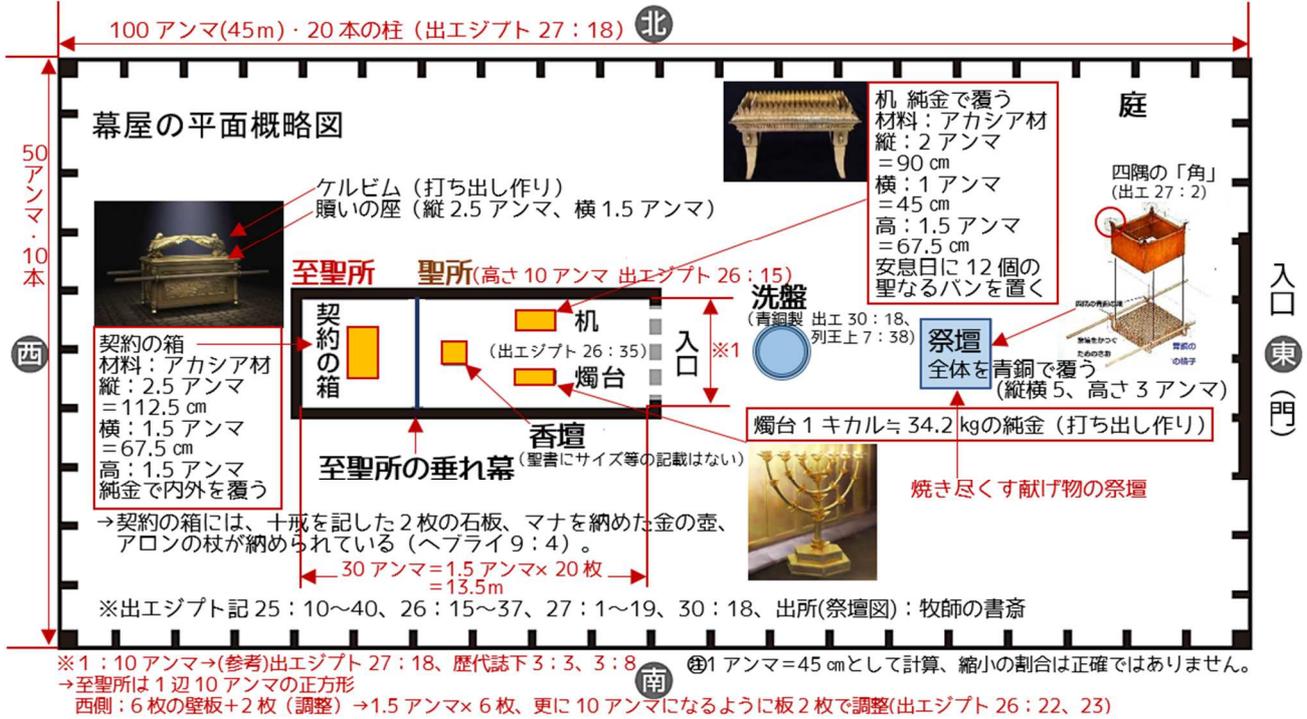
太陽暦	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
月(ヘブライ暦)	第一の月	第二の月	第三の月	第四の月	第五の月	第六の月	第七の月	第八の月	第九の月	第十の月	第十一の月	第十二の月	
ユダヤ暦	ニサン Nisan, Nissan	イヤール Iyyar	シバン Sivan, Sivan	タムーズ Tammuz	アブ Abh, Av	エルール Elul	ティシュリ Tishri	マルヘ シバン Marcheshvan	キスレーウ Kislev, Kislev	テベツ T'ebheth	シュバツ Shebat, Sabhat	アダ Adar, Adar	
バビロニアの月名 0:カナン古称	ニサン (アビブ)	イヤール (ジウ)	シワン	タンムズ	アブ	エルル	ティシュリ (エタニム)	ヘシュワ (ブ)	キスレウ	テベツ	シェバツ	アダ	
主な行事	七週間		七週祭(シャブオツ) 五旬祭(ペンテコステ Pentecoste ギリシア語)				1:新年 10:大贖罪日 15~21:仮庵祭(スコツ)		25:宮清めの祭				
	14~21 過越祭(ベサハ) 除酵祭		※ユダヤの三大祭: 過越祭、七週祭、仮庵祭										

- ユダヤ暦は、日本の旧暦と同じく、月の満ち欠けを基準に月を決める方式(太陽暦)です。
- ユダヤ暦は、一日が日没(夕方)に始まり、次の日の日没(夕方)に終わります。それは、聖書の創造の記事に「夕べがあり、朝があった」(創世記1:5他)と記されているからです。
- イスラエルでは普段の生活には、西暦も使っていますが、ユダヤ教の祝祭日や公式行事はユダヤ暦によって決められています。
- ユダヤ暦は天地創造を起点にして数えることになっており、西暦+3760年(西暦よりも3760年長い)となる。

▶幕屋

幕屋は神が民に会う場所である(出エジプト記 29 : 42~43)。神は幕屋に臨在し、民の中に住む(出エジプト記 25 : 22)。幕屋は礼拝の場、すなわち人々が献げ物を携えて来る場所、祭司たちがいけにえをささげる場所である。幕は王の色(青、紫、緋色)で染めた亜麻のより糸で織られた。

→幕屋 (移動式の神殿) : ミシュカーン(ヘブライ語)=宿る場所



至聖所の垂れ幕(パーローヘット) (出エジプト記 26 : 31、36 : 35)

バビロンの亜麻布を下地として、ケルビムが青、紫、緋色の糸で刺繍されている。→青：服従、紫：悔い改め、緋色(赤)：犠牲の血、愛
ケルビム cherubim (ヘブライ語ケルブの複数形) は、翼のある生き物で、至聖所を守り(出エ 25 : 18~22、列王上 8 : 6~7)、四つ(エゼ 1 : 10→人間、獅子、牛、鷲、エゼ 10 : 14→ケルビム、人間、獅子、鷲)の顔と獅子の体を持つ(エゼ 41 : 18~20)。

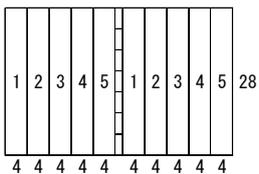
※四福音書→人間：マタイ、獅子：マルコ、牛：ルカ、鷲：ヨハネを表す。

幕屋を覆う幕 幕屋には四枚の幕がかけられる(出エジプト記 26 : 1~14)。

内側の幕 : ケルビムの模様の豪華な亜麻布の幕 (縦 : 28 アンマ=12.6m、横 : 4 アンマ (=1.8m) × (5 枚 + 5 枚) =18m と輪と留め金の幅、輪は青い糸で 50 個作り、同数の金の留め金で留め合わせる)

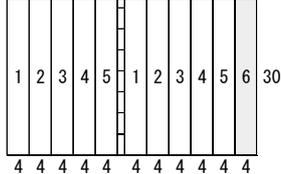
第 2 の幕 : 山羊の毛で織った幕(縦 : 30 アンマ=13.5m、横 : 4 アンマ×11 枚=19.8m と輪と留め金の幅)

亜麻布の幕



青い糸の輪50・金の留め金50

山羊の毛で織った幕



青い糸の輪50・金の留め金50

第 3 の幕 : 赤く染められた雄羊の毛皮、サイズは記されていない。

第 4 の幕 : じゅごん(水棲動物)の皮 (→防水の目的と思われる)、サイズは記されていない。



<https://messianic-revolution.com/>

【参考】アカシア マメ科・アカシア属に分類される常緑樹で、材質は樫より固く濃い色を持つ。深く主根を伸ばすため、年間を通してほとんど雨が降らない土地でも生長する(深く根を伸ばすため、強風にも強い)。根粒菌(根に根粒を形成し、大気中の窒素を特殊な働きによって還元してアンモニア態窒素に変換し、宿主へと供給する)を持つ肥料木で養分(窒素)を土に提供している。薪炭の材料になり、アカシア炭は、燃える時間が長い。

【ダニエル書 8 : 15～27】 →天使ガブリエルによるダニエルの幻の解き明かし

わたしダニエルは、この幻を見ながら、意味を知りたいと願っていた。その時、見よ、わたしに向かって勇士のような姿が現れた。すると、ウライ川から人の声がしてこう言った。

▶ 「**ガブリエル** (=神は力がある)、幻をこの人 (ダニエル) に説明せよ。」

彼 (ガブリエル) がわたし (ダニエル) の立っている所に近づいて来たので、わたし (ダニエル) は恐れてひれ伏した (→平伏した)。

彼 (ガブリエル) はわたしに言った。

▶ 「人の子よ、この幻は終わりの時 (→神の民に対する迫害の終焉で、終末のことではない) に関するものだということを悟りなさい。(→あなたが幻の中で見た出来事は、終わりの時に起こることだ。:LB)」

彼 (ガブリエル) がこう話している間に、わたし (ダニエル) は気を失って地に倒れたが、彼はわたしを捕らえて立ち上がらせ、こう言った。

▶ 「見よ、この怒りの時の終わりに何が起こるかをお前に示そう。定められた時には終わりがある。

お前の見た二本の角のある雄羊はメディアとペルシアの王である。

また、あの毛深い雄山羊はギリシアの王である。その額の**大きな角**は第一の王 (→アレキサンドロス大王) ※₂だ。その角が折れて (→BC323、アレキサンドロス大王死去) 代わりに**四本の角**が生えたが、それはこの国から、それほど力を持たない**四つの国**※₂が立つということである。

四つの国の終わりに、その罪悪の極みとして／高慢で狡猾な**一人の王**※₃が起こる。

自力によらずに強大になり／驚くべき破壊を行い、ほしいままにふるまい／力ある者、聖なる民を滅ぼす。

才知にたけ／その手にかかればどんな悪だくみも成功し／驕り高ぶり、平然として多くの人を滅ぼす。

ついに最も大いなる君に敵対し／人の手によらずに滅ぼされる。

これらの王国の末期に、その道徳的腐敗が極みに達すると、非常に狡猾で抜け目のない**一人の王**が、怒りを込めて権力の座にのし上がる。

その強大な権力は悪魔から出たもので、彼自身のものではない。彼は何をやっても成功し、どんなに強力な軍隊でも、敵対する者はみな打ち滅ぼし、神様の国民をも荒らし回る。

彼は人を欺く天才で、偽りの安全の中にどっぷりつかっている大ぜいの人を、不意に襲って打ち負かす。

それで、自分こそ偉大な王だとうぬぼれ、『君主の中の君主』に戦いをいどむ。だが、そうすることによって、自分の破滅の運命を決定的なものにしたのだ。人間の力では打ち負かすことができなくても、神様の御手によって、彼は打ち砕かれるからだ。(LB)

この夜と朝の幻について／わたし (ガブリエル) の言うことは真実だ。

しかし、(この幻は終わりの時に関わることなので) お前 (ダニエル) は見たことを秘密にしておきなさい。まだその日は遠い。」

わたしダニエルは (世界の強い国々が支配する歴史や神に民が非常に長い期間にわたって恐ろしい迫害や試練を受ける事実が分かり) 疲れ果てて、何日か病気になっていた。その後、起きて (ベルシャツァルの) 宮廷の務めに戻った。しかし、この幻にぼう然 (呆然・茫然) となり、理解できずにいた。

(以上、ダニエル書 8 : 15～27)

【参考】メディア・ペルシア

メディアは BC612、バビロンと共にアッシリアを滅ぼしたが、BC549 には、ペルシア (現在のイラン) に敗れ、ペルシアの属州となった。また、ペルシアは、BC549 にはメディア、BC539 にはバビロンを破った。BC331 には、マケドニア (ギリシア) のアレキサンドロス大王に敗れるまで、ペルシアが古代中近東世界を支配した。その広範囲な支配によって、ギリシアの文化や宗教が各地に広まった。

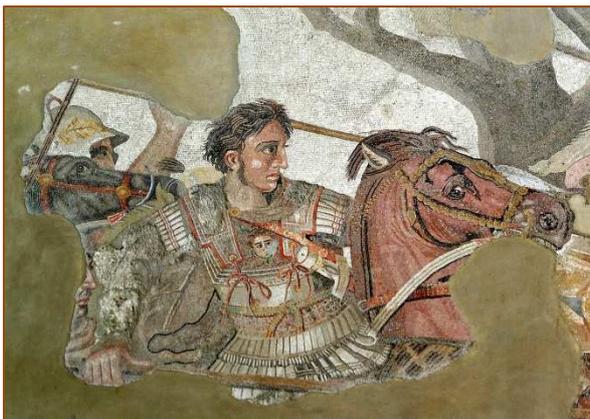
【参考】 イッソスの戦い(BC333)

(縦3x 横6m、1831年発見、ナポリ考古学博物館)

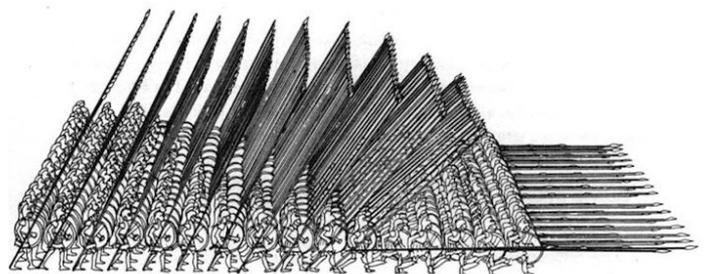


イタリア古代都市ポンペイ(BC100頃)の大富豪が造らせ、家の床を飾っていたモザイク画

上左□ (下: 拡大) がアレキサンドロス (アレクサンドロス) 3世、右○がダレイオス3世
 BC333、アレキサンドロスはアンティオキアの北西イッソスにおいてダレイオス3世自らが率いるペルシア軍10万と遭遇する(イッソスの戦い)。アレキサンドロスは騎兵と近衛兵(君主を警衛する君主直属の軍人または軍団)、徴募兵を縦横無尽に指揮してペルシア軍を敗走させた。



※愛馬: ブーケファラス (元、気性が荒い暴れ馬)
 ※アレキサンドロスが用いた最強の「槍」
 →全長6m、重さ7kg、バランスーとして槍の後ろ側に重りをつけた。発案: 父フィリッポス2世。
 →フィリッポス2世は、パンガイオン金山から算出する金銀で貨幣をつくり、富国強兵を盛んにした。
 長い槍を持った重装歩兵が8列に並ぶ、密集歩兵部隊による戦法をも編み出した。
 →**ファランクス戦法 (長槍密集隊戦術)**



長槍のバランスーとしての重り(後方部分、図左)と鉄製50センチの刃(先端部分、図右)

